

ヤリチン冒険者  
エロトラップダ  
ンジョン  
で  
メス墮ちする

「ほひいいいっ♡ ひいいいっ♡ まえもおっ♡  
うしろもおっ♡ ちくびもおっ♡ たまんにゃあ  
いのおおっ♡」

——ぎもちよすぎりゆうううっ♡

ぶしゃああああ——っ♡

「おおおおうおおおおっ♡」

ぐにゅぶにゅうっ♡

柔らかくて弾力性のある穴の中が、射精するペニス  
から少しでも多くザーメンを搾り取ろうと緩急をつけ  
て蠢いている。

「おっ♡ ほっ♡ ほっ♡ んほっ♡」

——し、しぼりやりえりゆうっ♡ あひゃあっ♡

涎がだらだらと流れているのが分かってても、口を閉  
じることができない。尻の中でゴブリンのチンポがす  
でに白濁を注いでいるが、尚も腰を打ち付けられてい  
るので、四肢が疲労で痙攣していた。

「……も、りやめえっ♡ おれえ……っ♡」

ずぼっと空気が抜けるような音と共に、扉の穴から  
ペニスを引き抜くと、重い音を立てて扉が開いていく。  
ゴブリンがまだ乳首と尻孔をなぶるので、床に転が  
って快楽に悶えてしばらく泣いていた。

やっとなゴブリンから解放されてしばらくぼうっとし  
ていたなら、扉が動く音が聞こえて、慌てて立ち上がる。  
どうにか足が動いてくれたので、しまりかける扉を  
すり抜けた。

変わらず小鳥はついてきているので、視界は明るい。  
だから、目前に広がる物体に釘付けになった。

「なんだ、これ」  
まるで触手でできた洞窟が、口を開けて待っている  
ようだ。

呼吸を感じるので、これは生き物なのだろう。  
——まさか入った途端、からだがとけるとかないよ  
な？



エルフの戦士  
家畜に成り下がる

「ぢゅっ♡

がぼっ♡ ぶぼっ♡ ごぼっ♡ じゅろおっ♡ じゅろおおっ♡

ちゅぽっ♡ ぢゅぽっ♡ ぢゅるうっ♡ ぢゅるるっ♡ づぢゅうっ♡

「んぶぼおっ♡ ぶぢゅるうっ♡ ぶふぼお……おぶうううっ♡」

——ひぎいいいいいっ♡ しゅ、しゅごいいいっ♡ し、しにゅううう——っ♡

ぶるぶると腰が快感に震えて、抗えない絶頂に身を委ねる。

ぶしゃ……しゃあああっ♡

「うぐぶおおお——っ♡

「おほ！ イキやがった！」

「お、おれも出る！」

「俺も！」

「ぼびゅ！ びゅるるるるる——っ!!

「んぶっ♡ おぶうううううっ♡

頭を押さえつけられ、喉奥と腰をがっちりと掴まれて、尻の奥に大量のザーメンを注ぎ込まれる。その勢いに四肢ががくがくと震えた。

——あちゅい!! くしゃい!! あっちゅいいいい!!  
「またイってるぞ!!」

「ひやははは!!」  
「ん、んん！」

三人の男はシエールの痴態を楽しみ、満足した様に囁っていた。

まるでザーメンは媚薬のように働き、シエールはすっかり頭が真っ白になって、あへあへと喘ぐ事しかできない。

さらに調子に乗ったケダモノ達は、今度はシエールを仰向けに地に押し倒すと、一人ずつペニスを吸い上げる。

乳首には左右から硬く反り返った男根をこすりつけ



孤独な少年はご主人様に偏愛される

「え!？」

嫁にするという言葉に困惑する。アーキムは小首を傾げて尋ねた。

「あ、あの、僕がおじさんのお嫁さんになるの？」

「ああ。今決めたぞ」

「でも、僕男の子」

「構わん。先に誰かに食われる前に頂くとしよう」

「あう？」

にゆりゆう……!

突然、ザイドがアーキムの股間に顔を寄せて、ペニスをしゃぶられてしまう。その舌が熱くて、背筋をぞくぞくと何かが這い上がってくる。唇に手を寄せて、声を我慢しているとまるで叱られるように甘噛みされ、腰が跳ねた。

「ひゃあんっ♡」

ちゅぽ♡

「ん、甘い声が出たなあ、感じて偉いぞ」

「へ、へんなのお……♡」

「気持ち良いという事だぞ？ 何も悪い事ではない」

「きもち、いいの？ ぽく？」

「そうだぞ。私に身を任せればもっと気持ち良くなれるぞ」

「ふひっ♡」

ぶちゅっ♡ ちゅぶっ♡ ぐちゅっ♡ ちゅぶうっ♡

♡

「あひっ♡ ひあっ♡ ひああんっ♡ やっ♡ あっ

んっ♡」

ザイドの頭に両手を置いて、自分の口から発せられる甘ったるい声に混乱する。

——ぽく、どうしてこんな、声がちゃうのおっ♡  
背筋がぞくぞくして、何かが這い上がってくる感覚がする——。

「あああくっ♡」

ふるふる……っ♡